

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520531

研究課題名(和文) 一般文法理論に基づく文断片と文構造のかかわりに関する英文法研究

研究課題名(英文) A Study on English Sentence Fragments and Sentence Structure from the Viewpoint of General Linguistic Theory

研究代表者

天沼 実 (Amanuma, Minoru)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：30222681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：動的文法モデルに立脚し、とりわけ否定辞付き話題化構文について、否定辞付き文断片と述部省略文の統合との観点から、幅広い一次発話資料の観察と統合を動機づける特性の抽出をはかった。当構文は拒絶や禁止などの複合否定発話行為の言語的手段であること、話題句は拒絶や譲歩を認めない状況・条件等を典型的に提示し、述部省略による否定焦点化との複合により要求や命令などの強い意図も間接的に表しうること、またその機能の顕在化が文断片統合の重要な動機である可能性があることなどを観察・抽出した。外的所有格構文に関する文断片等の事実観察も行い、その特異性、とりわけ所有格表現に代わる定冠詞の出現を導出する試案を得た。

研究成果の概要(英文)：This study pursues the possibility of fragment-integration analysis of some constructions in English with otherwise inexplicable idiosyncrasies, including the not-topic construction, in the framework of the dynamic model of grammar. It observed that the construction typically serves as a linguistic means in performing such complex negative forces as rejection, prohibition, etc. It also observed that the not-topic typically presents a situation or condition that one cannot deny or refuse, which, in combination with the effect of the main sentence negation, gives the entire construction its function of indirectly expressing strong request or order. Syntactic realization of such functions plausibly works as a major motivation for integrating the not-fragment and the short negative response into a sentence structure. The study also pursues the possibility of deriving the use of the definite article the in the external possessor construction from its use in sentence-fragments.

研究分野：英語学、理論言語学

キーワード：動的文法理論 文断片 英文法

## 1. 研究開始当初の背景

人間が自然のうちに習得・使用することができる文法はどのように定義されるべきかという「可能な文法」の問いは、およそ一般言語理論研究に共通した中心的課題の一つであると言ってよい。

現代の言語研究の理論的枠組みのほとんどにおいては、言語習得過程の中間段階、すなわち子供の文法の属性の如何や習得の順序などは成人の文法の属性を左右しないという、「瞬時的な」言語習得モデルを仮定し、「可能な文法」の定義をもっぱら成人の文法の属性のみにもとづき追究してきた。しかしながら、その代表とも言える Chomsky を創始者とする生成文法理論は、英語等主要言語の文法の中核部について大胆かつ興味深いさまざまな知見をもたらしてはきたが、周辺的な言語現象や類型論的な多様性、言語習得過程の説明などに依然として多くの課題を残している。

構文文法や機能的統語論、認知言語学なども(暗に)瞬時的な文法モデルに依拠していると言ってよい。それらは周辺的な構文や細かな事実関係について各々の得意とする言語現象を対象に興味深い記述や一般化を提示していると認めることはできるものの、「可能な文法」の問いに対して説明原理による有効な答えが得られるかどうかは不明である。

上述のような一般言語理論研究のいわば主流に対して、「動的・非瞬時的な」文法理論 (Kajita (1977, 1997, 2002 等)) の枠組みでは、言語習得のある段階から次の段階への文法の移行にかかる一般制約に説明原理を求めることにより、可能な文法をより狭く定義すると同時に、数多くの一見特異な言語事実について、原理的かつ反証可能性の高い説明を与えられることが示されている (Ukaji *et al.* (eds.) (1998), Chiba *et al.* (eds.) (2003) 等)。

上述のような諸理論の動向を背景に、文断片 (sentence fragments) にかかる現象が理論の経験的基盤と説明的妥当性を問う新たな試金石として近年、関心を集めており、Progovac *et al.* (2006) 等において様々な分析が試みられているところである。

## 2. 研究の目的

本研究は、非瞬時的・動的な文法モデルの観点から、現代英語におけるいくつかの特異な構文の統語的、意味・機能的属性を文断片の形式的特徴や談話構造の属性の反映として捉えるという視点から、より精緻な分析と原理的な説明を試み、非瞬時文法モデルによる一般文法理論の構築に貢献するものである。

英語における周辺的な諸現象について近年では、例えば Culicover (1999) や Culicover and Jackendoff (2005) などが、特異ゆえに未着手である言語現象を含む事実観察をもとに、統語論と意味論の関係について、Chomsky 系

のそれとは対照的な、大胆な提案を行い、興味深い一般化の方向を提示している。彼らの分析では、特に削除や省略、破格な語順や共起関係を含む特異性の強い構文について、従来の生成文法に比べて大幅に簡略化された統語構造が基底生成されるという立場を取っている。彼らの提案は、個々の構文がなぜそのような配列形になっているのか、なぜその配列形がその特定の意味構造と結合するのか、一般に統語と意味の可能な結合はどのように制約されているのかという根本的な問いに照らして検証されなければならない。しかしながら、彼らの統語分析の視点は、音形として実現されていない要素については形式素を想定しないという点で文断片研究における、いわゆる nonsentential analysis にも通じるところがあり、談話中の他の言語表現や語用論的な非言語情報との関係の下で使用される断片と、これまで文法の問題としてもっぱら捉えられてきたある種の構文の特徴の間には連続性があるのではないかという興味深い示唆が感じられる。例えば Culicover (1999) が扱っている *Not-topic* 構文 (*Not like that you can't . . .*) などは、否定辞 *not* の照応的用法による断片 (*Not like that.*) や否定の動詞句省略文 (*You can't . . .*) との関係に興味をもたれるところである。この他にも、これまでもっぱら文法の問題として取り扱われてきた英語の諸構文の中に、もとをたせば文断片や談話中の別個の発話であった表現が、特定の談話の結合性 (coherence) や発話の力 (illocutionary force) などの機能的な要因が動機となる何らかのプロセスによって文法の中に取り込まれていったと考えられるものがあるのではないかと思われる。天沼 (2012) においてはそのような「文断片統合」の視点から *Not-topic* 構文の分析案を提示したが、本研究では、そのような説明の経験的基盤の強化とそれを可能にする一般文法理論としての動的・非瞬時文法理論の追究を深めることを目指し、Geluykens (1994) や Kehler (2002) など談話構造と文法の理論にまたがる近年の興味深い研究を踏まえつつ、*Not-topic* 構文その他の一見特異な構文の説明や、この観点から有効な説明を与えられる見込みのある事実関係の発掘を試みる。

## 3. 研究の方法

*Not-topic* 構文をはじめ、文断片に基づく分析が有効と思われる特異性をはらんでいるいくつかの構文について、関連する可能性のある断片の実例を収集し、形式的特徴とともに、特にそれらが使われる談話文脈の特性を観察する。これらの特性が各構文の属性のなかにどのように反映され、また文法化されて取り込まれているのかを考察し、動的・非瞬時的文法理論の立場から代案の展望を探る。

一次資料収集については、expressive なモードでの口語発話資料により、言語的文脈や

場面などの談話の情報、音調などを含めた総合的な観察を行うことが考察対象構文の特性を抽出するのに有効なことから、主としてドラマや映画などの DVD 等を活用した事実調査を進めた。

#### 4. 研究成果

*Not-topic* 構文及び否定的文断片等、関連する構文や語法についての一次資料観察から興味深い実例を多数収集し、当構文の形式的な変種の整理を進めつつ、天沼 (2012) の統語分析試論を踏まえ、個々の事例について、統語形式、言語的意味、語用論的意図、音調などの多角的な視点から観察を重ねた。

この構文が使われる言語的・非言語的文脈から得られる解釈や発話の意図としては、(間接的な)拒否、拒絶、禁止、反駁などの発話行為のタイプが顕著に出現し、単純な命題否定(発話行為としては伝達あるいは断定)にとどまるような実例は観察されないことを確認した。このことはすなわち、当構文が基本的には、拒絶、禁止、反駁などの複合的な否定発話行為と直接的な関係を持つ言語的手段として用いられる形式であることを示していると言つてよい。

更に詳しく見ると、当構文の話題句(否定話題句)は文脈上、否認や拒絶、譲歩などを許さない、揺るがし難い状況や条件などを提示する場合が数多く見られ、そのような場合がおそらく典型であることが伺える(例・*Not in my car you won't (smoke). / Not without my money I won't (leave).*)。そのような情報を否定の焦点とする一方で、節本体に否定応答文と同形式の述部省略形(例・*I won't .*)を典型的に用いることにより文否定を文末焦点として再強調する効果も重ねることにより、単なる拒絶や禁止だけでなく、否定話題句の内容から連想される要求や命令などの強い意図をそれらと複合させる形で表現しているものと考えられる。

否定的文断片が単独で現れる場合においても同様に、文脈上、否認や拒絶、譲歩などを許さない揺るがし難い状況や条件などを提示することによって、否定的な強い要求や命令などの意図を表していると思われる用例がたびたび観察される(例・*Don't ever again give that kind of order. Not while I'm alive.*)。否定的文断片が用いられる際に付随するそのような発話の意図を言語形式により明示しようとする機能的要請が否定的文断片と否定応答文形式の統合というプロセスの重要な動機付けの一つとなっている可能性を見出すことができる。

否定辞付き話題化構文と同様に、作業仮説的に文断片を基体として想定するのが有効と思われる構文として、分離疑問文(Split Question)や外的所有者構文(External Possessor Construction)などにも着目し、当該の構文及び関係する可能性のある文断片について事例収集と観察をおこなった。合わせ

て、Geluykens (1994)や Kehler (2002)、Elugardo and Stainton (2006)等の先行研究に照らした動的な分析の可能性を探った。

分離疑問文は、形式的には構成素(*wh-*)疑問文とそれに対する応答の候補の焦点となる構成素からなっているが、音調的には両者の間に切れ目が無く、一つのイントネーションにまとまっている表現形式である。

これら二つの要素が別個の発話として現れる場合には、構成素疑問とそれに対する応答の候補の焦点となる構成素の連鎖となり、全体としては真偽(*yes-no*)疑問の発話意図を伝達する(例・*Who is this gentleman? Your brother? Is this gentleman your brother?*)。それに対して、分離疑問文では、主節部である構成素疑問には実質的な疑問の意図はなく、全体として皮肉や嘲笑などを表すある種の修辭疑問文として用いられる場合が一般的であることが事例収集と多角的な観察から明らかになってきた(例・*I gave him my blessings.--What're you, the Pope?*)。

このような機能は構成素疑問文と応答の候補表現の二つの発話の連続でも果たしうることである(例・*I gave him my blessings.--What're you? The Pope?*)が、その場合は、構成素疑問文が独自の疑問文としての力を失っており、応答候補表現を焦点とする前提(*presupposition*)として背景化された情報をもっぱら表していることになる。このような関係にある連続した別個の発話を前提-焦点という情報構造の単位をなす一つの構文として統合しようとする一般原理の存在が想像されるところであり、更なる調査・検証に値する課題発掘となったところである。

外的所有者構文については、事実調査の結果、関連する可能性の高い文断片の用法として次の  $A_2$  のような興味深い例が得られている。

$A_1$ : Somebody stuck a knife in him.

$B_1$ : Where?

$A_2$ : In the stomach and the back.

上例  $B_1$  の *where* は、述語動詞 *stuck* が表す「接触」の意味からの語用論的推論により、被接触物 *him* を全体とする部分(*part-whole*)の関係にある場所より具体的には、いずれかの身体部分をその値の範囲としていることは明らかである。そのことから、 $A_2$  中の *the* は所有・所属関係が文脈上明白である場合に所有格代名詞に代わり用いられる *the* (例・*Roy will be right in. He's parking the car.*)の出現であると考えられる。外的所有者構文においては、場所句中の被所有物に所有格代名詞ではなく定冠詞 *the* が用いられる(例・*Somebody stabbed him in the /\*his back.*)のが特異な点の一つであるが、場所句の出自が文断片にあると想定することにより、*the* の出現について特異な扱いをせずに説明できる可能性があることを上述の観察は示唆している。文断片を基体とする動的な構文分

析が有効である興味深い例として、更に調査・分析を進め、理論的説明を探る必要がある。

< 参照文献 >

天沼実 (2012) 「否定辞付き話題化構文の特異性 文断片からの動的・機能的分析」  
*JELS* 29, 3-9.

Chiba, S. et al. (eds.) 2003. *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, Kaitakusha.

Culicover, P. W. 1999. *Syntactic Nuts*, OUP.

Culicover, P. W., and Jackendoff, R. 2005. *Simpler Syntax*, OUP.

Geluykens, R. 1994. *The Pragmatics of Discourse Anaphora in English*, Mouton de Gruyter.

Kajita, M. 1977. "Towards a Dynamic Model of Syntax," *SEL* 5, 44-76.

----- 1997. "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," in Ukaji et al. (eds.), 37-93.

----- 2002. "A Dynamic Approach to Linguistic Variations," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Y. Kato, 161-68, Sophia Univ.

梶田優 (2004) 「< 周辺 > < 例外 > は周辺・例外か」『日本語文法』4.2, 3-22.

Kehler, A. 2002. *Coreference, Reference, and the Theory of Grammar*, CSLI.

Progovac, L. et al. (eds.) 2006. *The Syntax of Nonsententials*, John Benjamins.

Ukaji et al. (eds.) 1998. *Studies in English Linguistics*, Taishukan.

## 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

〔 雑誌論文 〕 ( 計 0 件 )

〔 学会発表 〕 ( 計 0 件 )

〔 図書 〕 ( 計 0 件 )

〔 産業財産権 〕

○ 出願状況 ( 計 0 件 )

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○ 取得状況 ( 計 0 件 )

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔 その他 〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

(1) 研究代表者

天沼 実 ( Amanuma Minoru )

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号 : 30222681